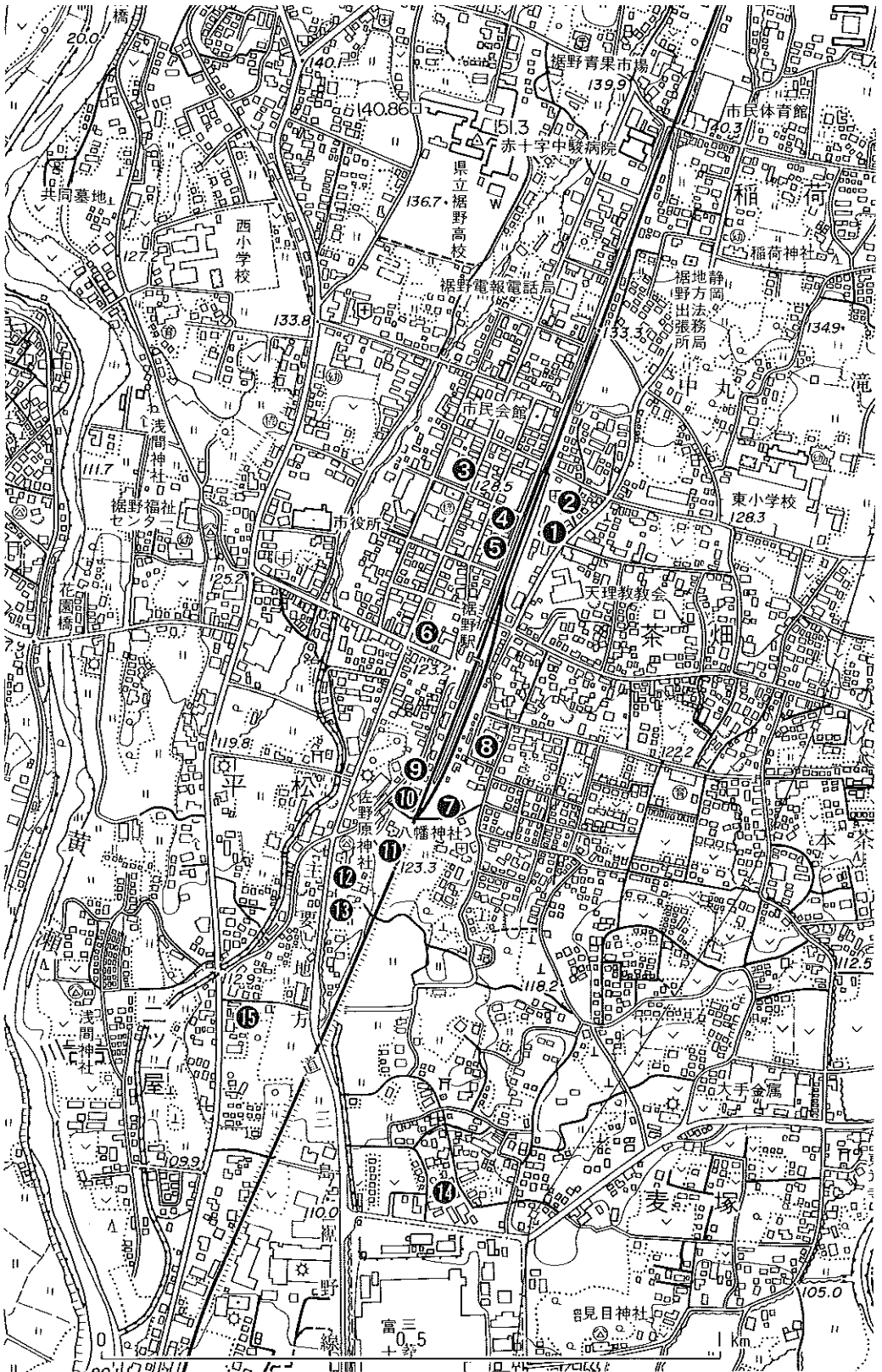


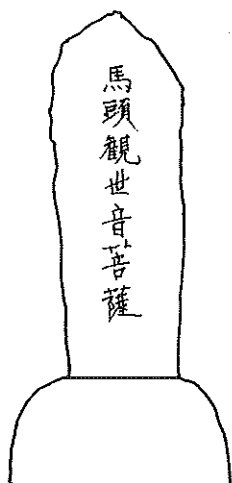
# 平松地区



平松地区



2 馬頭観音



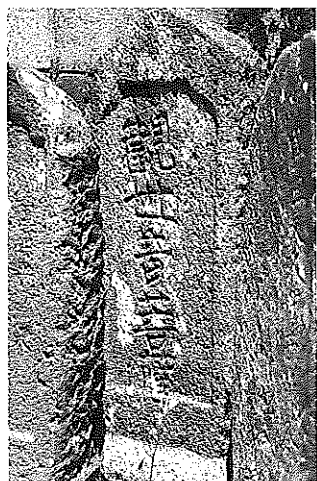
1 馬頭観音



4 馬頭観音



3 一石五輪塔



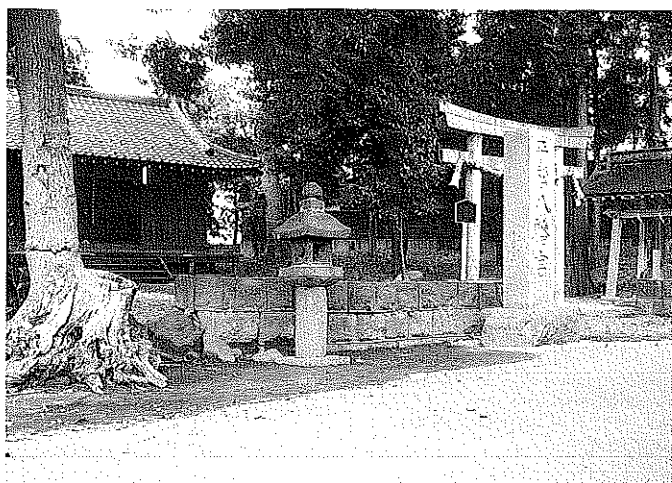
5-3 観世音菩薩



5-2 万盞塔



5-1 馬頭観音



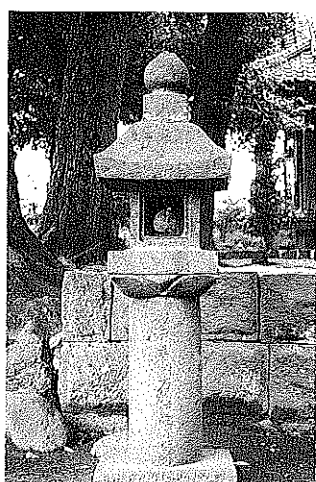
7 八幡神社



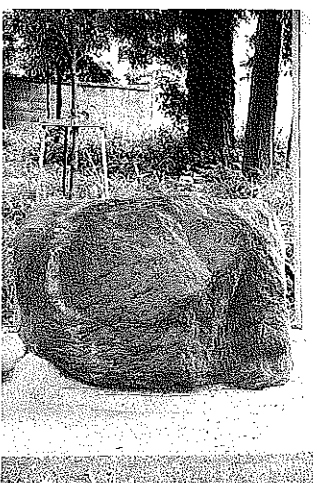
6 庚申塔



7-2 神社標石



7-1 石灯籠



7-4 手洗石



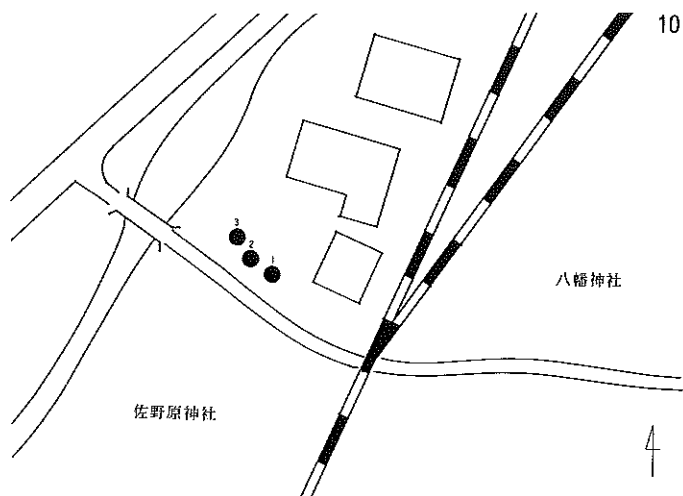
7-3 鳥居



9 刻經塔



8 庚申塔



10 佐野原神社北側



10-3 刻經塔



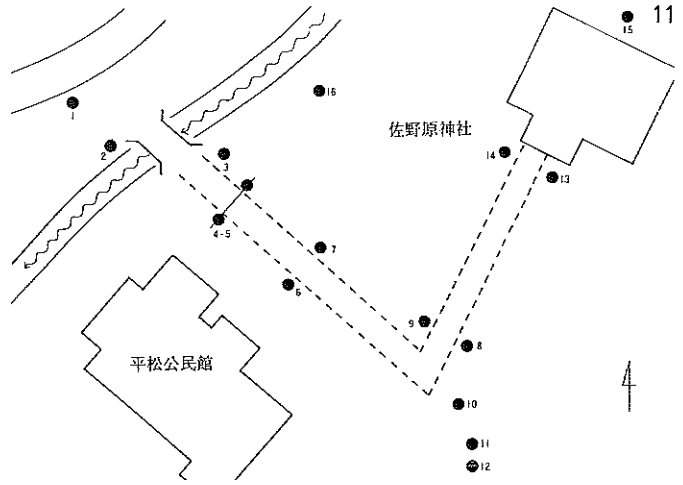
10-2 毘沙門天



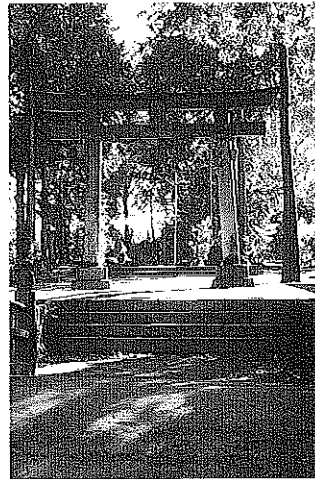
10-1 道祖神



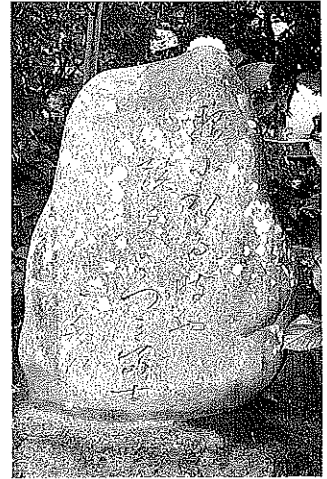
11-1 神社標石



11-5 鳥居 (新)



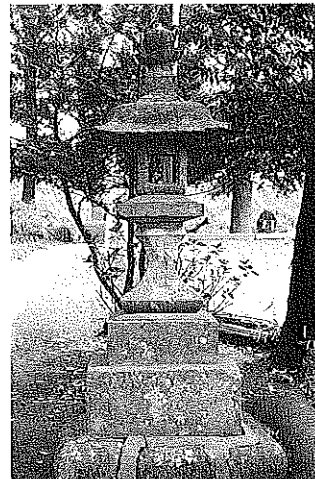
11-4 鳥居 (旧)



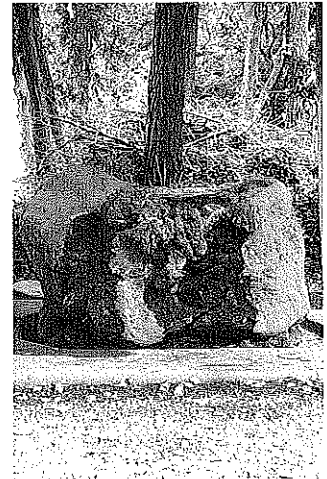
11-2 文学碑 (句碑)



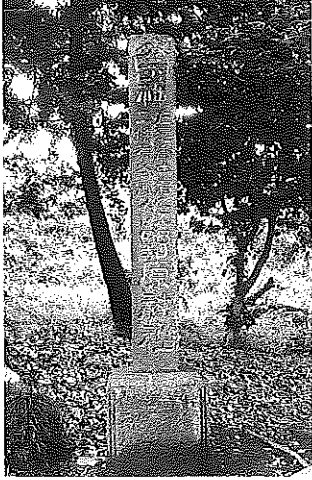
11-7 石灯籠



11-6 石灯籠



11-3 手洗石



11-10 神社標石



11-9 石灯籠



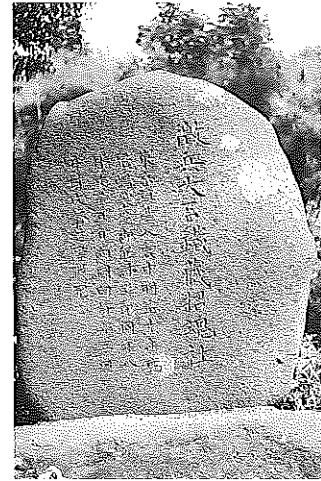
11-8 石灯籠



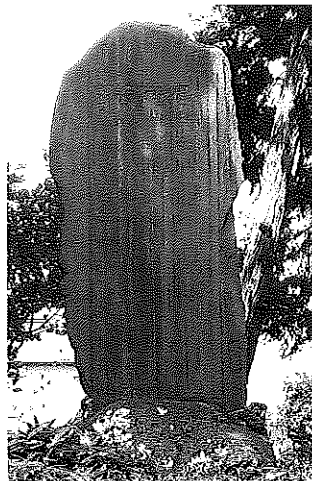
11-14 狛犬



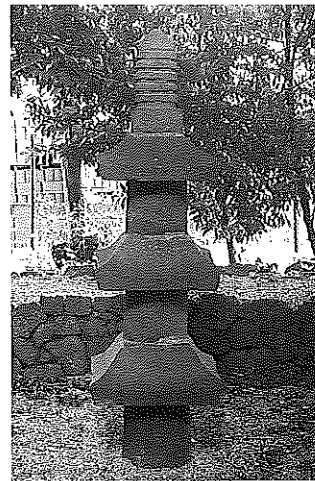
11-13 狛犬



11-11 碑 (大石鉄葎招魂)



11-16 碑 (神社縁起)



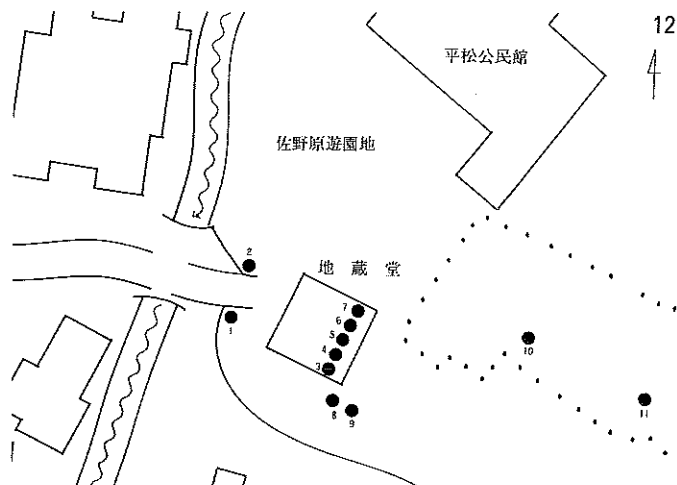
11-15 層塔 (將軍塚)



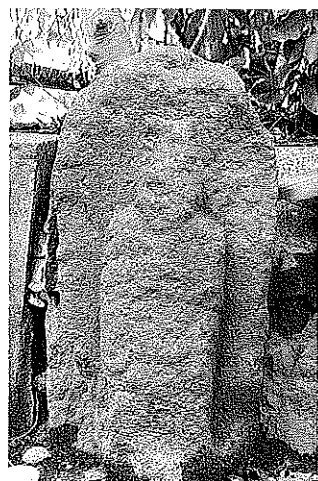
11-12 刻經塔 (宮方塔)



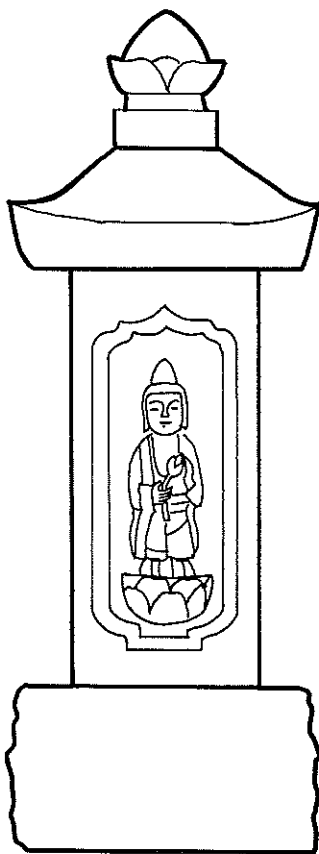
12-1 石灯笼 (部分)



12-3 地藏菩薩



12-2 馬頭観音



12-6 作衛門塔



12-7 順礼供養塔



12-5 地藏菩薩

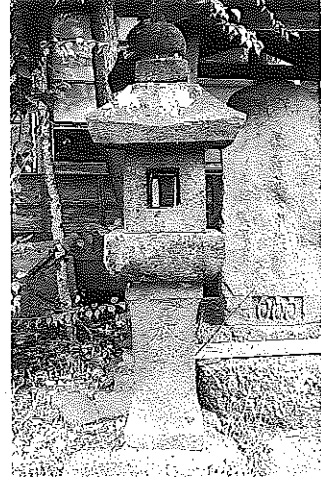




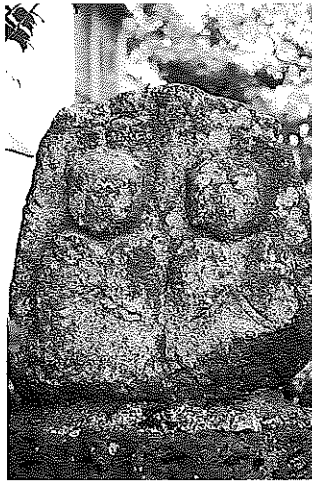
12-10 一石五輪塔



12-9 庚申塔



12-8 石灯籠



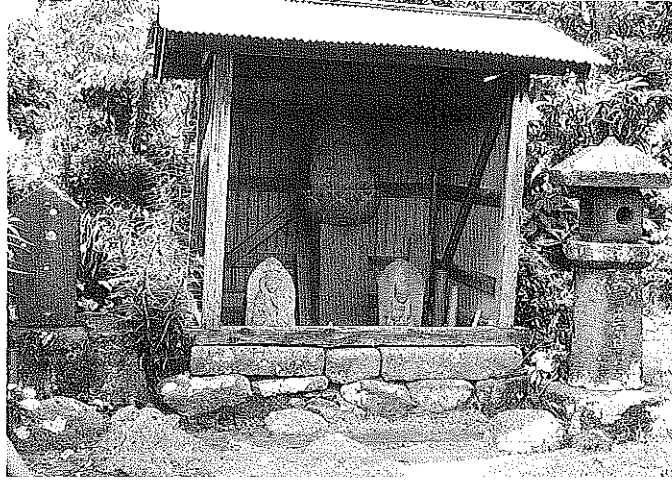
14 道祖神



13 牛観音



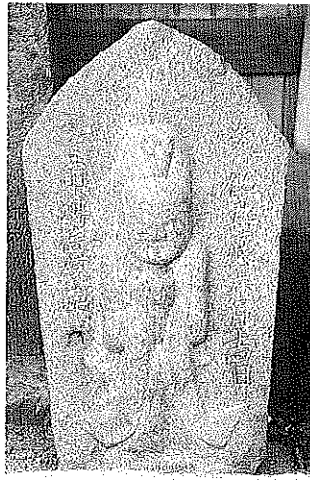
12-11 一石五輪塔



15 平松722-5番地 後藤氏邸前



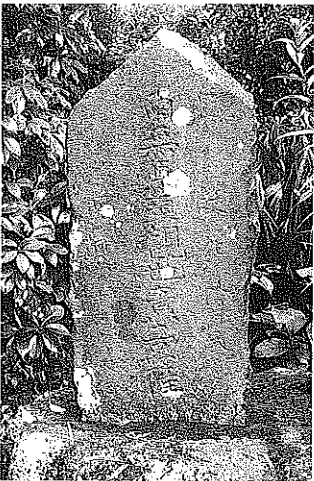
15-3 馬頭観音



15-2 馬頭観音



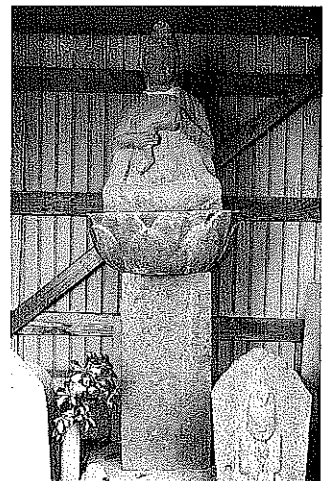
15-1 石灯籠



15-7 馬頭観音



15-6 大日如来



15-5 順礼供養塔

平松地区区石造物一覽表

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
1	馬頭観音	自然石	嘉永1(一八四八)	87×26	(正) 馬頭観世音菩薩 (背) 嘉永元年申夫 六月十三日 施主 伊工門
2	馬頭観音	自然石	大正13(一九二四)	89×42	(正) 馬頭観世音菩薩 大正十三年八月八日 齊藤茂二郎建之
3	一石五輪塔			114×28	(「十三塚」伝承あり)
4	馬頭観音	舟型	昭和9(一九三四)	97×31	(正) 馬頭観世音 (背) 昭和九年六月七日 飯塚圭次郎建之
5-1	馬頭観音	自然石	文久4(一八六四)	80×46	(正) 馬頭観世音菩薩 (左) 歳在文久甲子仲冬 施主 芹沢八百蔵
5-2	万霊塔	櫛型	享保5(一七二〇)	68×27	(正) 三界萬霊等 享保五庚子夫 八月十三日
5-3	観世音菩薩	舟型		73×26	(正) 観世音菩薩 (「十三塚」伝承あり)
6	庚申塔	自然石		40×23	(正) 庚申塔

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
10-3	刻経塔	自然石		53×38	(正) 妙法蓮華經
10-2	毘沙門天	自然石		72×60	(正) 毗沙門天 儀士  (「十三塚」伝承あり)
10-1	道祖神(単体)	浮彫立像	享保8(一七二三)	93×33	(正) 享保八〇〇天 九月吉日  (風化)
9	刻経塔	自然石		89×44	(正) 妙法蓮華經 神儀士  (「十三塚」伝承あり)
8	庚申塔	自然石		72×42	(正) 庚申塔  (「十三塚」伝承あり)
7-4	手洗石	自然石		74×98	
7-3	鳥居	明神型	大正4(一九一五)	311×370	(左柱背) 奉納 大正四年七月吉日 泉村平松四番地 杉山與市
7-2	神社標石	角柱	平成4(一九九二)	226×46	(正) 平松八幡宮 (左) 静岡真神社庁長 矢田部正己 謹書 (背) 平成四年九月吉日氏子中
7-1	石灯籠	灯籠	宝永5(一七〇八)	145×46	(正) 妙法奉納 石燈籠御室前 (右) 宝永五戊子稔十一月十五日 (左) 駿効駿東郡平松村 施主 □左南

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
11-1	神社標石	角柱	昭和17(一九四二)	269×46	(正) 縣社佐野原神社 (右) 福嶋信太郎謹書 (左) 海軍大将 山本英輔 謹書且 (背) 紀元二千六百二年四月十二日建之
11-2	文学碑(句碑)	自然石	天保12(一八四一)	94×45	(正) 眼にかゝる 時や殊更 さつき富士 はせを (背) 天保十二辛丑年仲秋建之
11-3	手洗石	自然石	昭和7(一九三二)	82×116	(左) 奉納 昭和七年 岡田虎三
11-4	鳥居	明神型	明治43(一九一〇)		(石柱背) 紀元二千五百七十年 五月吉日 (基礎背右) 發起人 服部大八 全三好維堅 社掌 清水東良 信徒 氏子中 (基礎背左) 石工 山口岩吉 (倒壊)
11-5	鳥居	明神型	平成6(一九九四)	419×502	(正面額) 佐野原神社 (石柱背) 平成六年四月吉日 (左柱背) 平松 氏子中
11-6	石灯笼	灯笼	明治31(一八九八)	193×56	(正) 献燈(背) 紀元二千五百五十八年四月十日 (台座右) 下野上都賀郡 大出俊作 (火袋補修)
11-7	石灯笼	灯笼	明治31(一八九八)	203×46	(正) 献燈 (背) 紀元二千五百五十八年 四月十日 (台座背) 奥州一ノ関藩士 佐々木四郎三郎 (火袋補修)
11-8	石灯笼	灯笼	昭和17(一九四二)	276×69	(正) 献燈(背) 紀元二千六百二年十二月十二日 奉納 大出俊夫 (台座背) 作 杉村新太郎 (火袋補修)

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
11-16	碑 (神社縁起)	自然石	明治15 (一八八二)	289 × 110	別記2 (275頁)
11-15	層塔 (將軍塚)	三重		198 × 67	(將軍塚・「十三塚」伝承あり)
11-14	狛犬		昭和16 (一九四一)	200 × 68	(台座背) 奉納 紀元二千六百年五月吉日 東京 鈴木忠次郎 世話人 富岡國太郎 野崎伊作
11-13	狛犬		昭和16 (一九四一)	197 × 62	(台座背) 奉納 紀元二千六百年五月吉日 東京 鈴木忠治郎 世話人 富岡國太郎 野崎伊作
11-12	刻経塔 (宮方塔)	自然石		92 × 58	(正) 妙法 宮方 武士
11-11	碑 (大石鉄蔵招魂)	自然石	明治11 (一八七八)	109 × 63	別記1 (275頁)
11-10	神社標石	角柱	明治43 (一九一〇)	250 × 27	(正) 祭神 左近衛中将 二条為冬卿 佐野原神社 (背) 紀元二千五百七十年五月吉日建之
11-9	石灯笼	灯笼	昭和17 (一九四二)	276 × 69	(正) 献燈(背) 紀元二千六百年十一月十二日 奉納 大出俊夫 東京市蒲田区本蒲田 (台座背) 作 杉村新太郎 (火袋補修)

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
12-1	石灯笼(部分)	灯笼	宝曆6(二七五六)		(正)奉納石灯笼  宝曆六丙子歳 (倒壊・火袋・中台欠落)
12-2	馬頭観音	舟型立像		54×26	(一部欠落・風化)
12-3	地藏菩薩	笏付角柱 くり抜		167×53	(佐野原地感堂内)
12-4	地藏菩薩(部分)	丸彫		40×18	(残存頭部/佐野原地感堂内)
12-5	地藏菩薩	丸彫立像		90×22	(佐野原地感堂内)
12-6	作衛門塔	笏付角柱 くり抜	寛永19(二六四二)	140×53	(右)寛永十九年年四月 (左)平松新田開発人 作衛門塔 (聖観音/佐野原地感堂内)
12-7	順礼供養塔(西)	丸彫座像	宝曆2(二七五二)	142×48	(台座正)西國三十三處供養 寶曆二癸酉歳 三月十七日 (台座右)茶畑村 長田氏忠左衛門 神倍氏伊左衛門 同氏角右衛門 服部平八 (聖観音/台座左 読取不能/佐野原地感堂内)
12-8	石灯笼	灯笼	宝曆7(二七五七)	178×51	(正)奉納 (右)宝曆七年 (左)丁丑四月吉日

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
15-4	馬頭観音	浮彫立像		31×25	(正) □ 元庚申年 □ 十一日 二本松 渡邊氏 □ (上部折損)
15-3	馬頭観音	舟型立像		57×27	
15-2	馬頭観音	舟型立像	文化5 (一八〇八)	53×26	(正) 文化五辰 六月吉日 市川治右衛門
15-1	石灯籠	灯籠	宝曆3 (一七五三)	133×40	(正) 宝曆三癸酉三月吉日 志主 同行
14	道祖神(双体)	浮彫立像		56×40	(風化)
13	牛観音	櫛型	昭和29 (一九五四)	79×26	(正) 奉丑観喜喜薩 高城鶴吉六十二才 昭和二十九年十七日(牛頭像浮彫)
12-11	一石五輪塔			105×36	(「十三塚」伝承あり)
12-10	一石五輪塔			109×35	(「十三塚」伝承あり)
12-9	庚申塔	自然石	享保10 (一七二五)	131×54	(正) ○ 奉造立庚申供養 駿州駿東郡平松村施主 敬白 享保十乙巳天卯月吉日 (三猿くり抜)



番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
15-5	順礼供養塔 (横)	丸彫座像	寛延2 (一七四九)	150 × 30	(台座正) 横道順礼供養塔 寛延二〇〇年 八月十七日 平松 妙性 智音 市衛門妻 三衛門妻 麦塚 宇兵衛 (台座左) [ ] 母 同 [ ] (台座右) 茶畑村 茂衛門母 小林村 又衛門母 佐五衛門母 (聖觀音)
15-6	大日如来	自然石		44 × 25	(正) 太日如来妙法
15-7	馬頭観音 (道標)	駒型	文化8 (一八一〇)	110 × 34	(正) 南無馬頭観世音菩薩 文化八未天 四月十日 左リ茶畑

別記1 碑 (大石鉄蔵招魂)

(正) 徵兵大石鐵蔵招魂社 東京鎮臺入宮中明治十年鹿兒嶋  
暴徒御征討之節同年八月廿二日向國臼杵郡三田井村  
攻撃之際戦死

(背) 大石鐵蔵者駿東郡定輪寺村平民大石伊平治男也 于時  
明治十一年八月静岡縣第一大區三小區貳拾三ヶ村衆庶  
賞子之忠死請宮許於佐野原神社境内建築招魂社以慰祭  
靈魂畢

別記2 碑 (神社縁起)

(正) 佐野原神社碑記 陸軍中將從四位勲二等谷干城撰  
嗚呼喜順 [ ] 者天理之正人 [ ] 所頼 [ ] 生也故千古萬難殺  
身以報 [ ] 王室若新田楠名蘇菊池諸公雖經千百歲之久儼  
然如生人皆畏而敬之波殘財之徒雖或逞一時身死國凶醜

名獨存倫父牧豎猶且愧齒為是豈偶然哉孟軻氏曰人性善  
噫信矣頃者駿人服部大八分三好維堅來請曰我駿東郡佐  
野原春建武之没左近衛中將贈位三藤原為冬公戰死之地  
也有古墳十有三其所謂將軍冢者乃為公墳墓土人相傳展  
拜 [ ] 怠自 王政維新 南朝諸公及其他死 王事春所在  
崇顯大公 [ ] 歆所未有表見恐終將泯沒於無聞是豈非吾輩  
之責乎於豈衆相謀釀 [ ] 上請建祠 [ ] 妥神靈歲時禮祀稱曰  
佐野原神社時明治九年也而未有碑文 [ ] 有記焉余聞之擊  
節曰育是哉駿人上好義也既展於其墓又建其祠以誠誠聞  
風者亦有所興起汎就其地而拜其祠 [ ] 乎按公權大納言為  
在公之子為定家公玄孫家世人詞藻著而公有 [ ] 略之才妹  
為子入後醍醐帝宮生尊良宗良二親王尊良之東下討賦公  
居股肱任師敗死之史稱公衛敵陣自名而 [ ] 其壯烈可想見  
賊臣尊氏視其首級猶且哀惜焉馴公之為人亦可知矣嗚呼

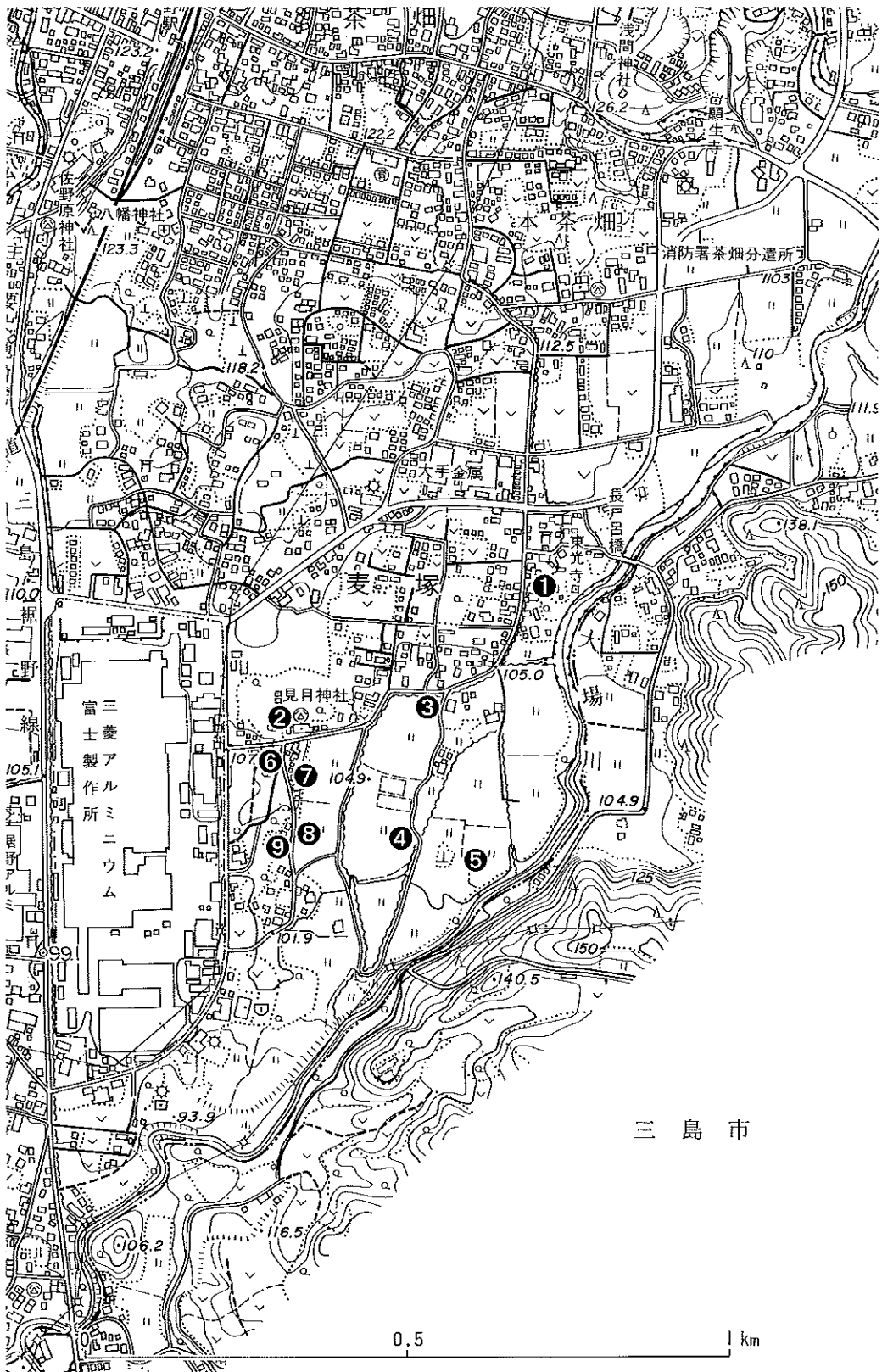
史有□文公之事迹隱晦□明然而數百歲之後駿人追慕如  
比則喜順憎逆之為天理豈□蓋彰明赫暮哉嗚呼駿人之忠  
厚因公愈顯而公之忠烈亦同駿人益 明於天下神人和陽  
而風毅之道存為余故□辭而為之記

明治十五年六月 陸軍大將兼左大臣二品大勳位熾仁  
親王篆額

陸軍歩兵大佐從五位勳四等長屋重名書

廣羣雀刻

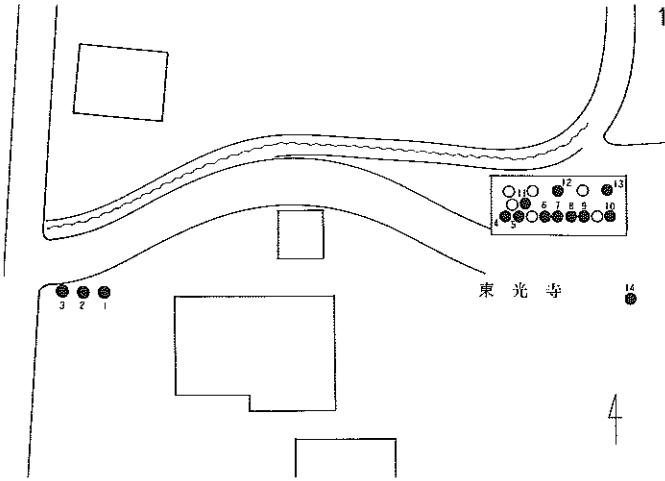
# 麦塚地区



三島市

0.5 1 km

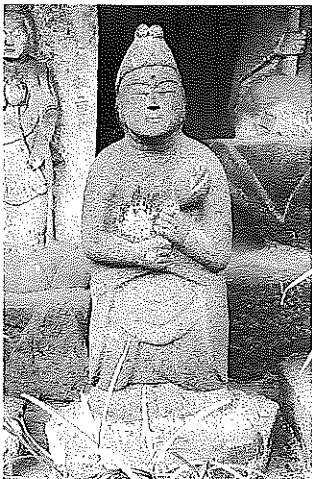
# 麦塚地区



1-2 廻国塔



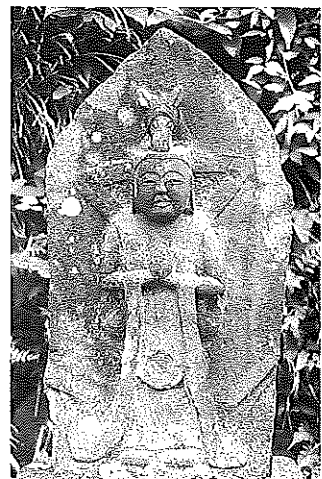
1-1 寺院標石



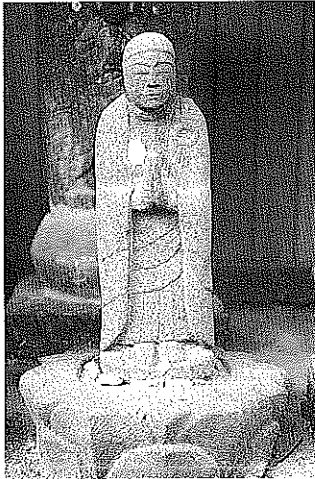
1-6 聖観音



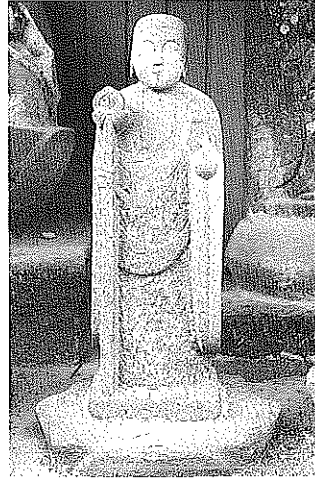
1-4 聖観音



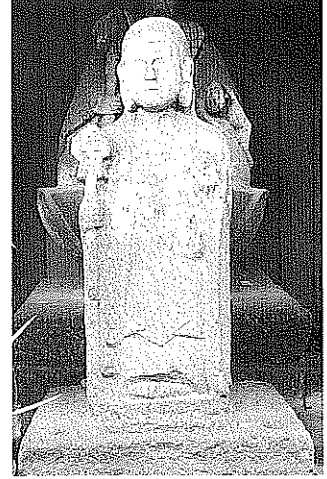
1-3 馬頭観音



1-9 地藏菩薩



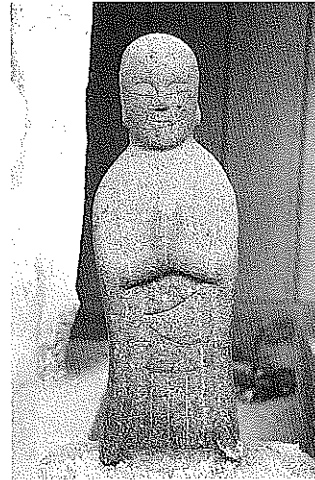
1-8 地藏菩薩



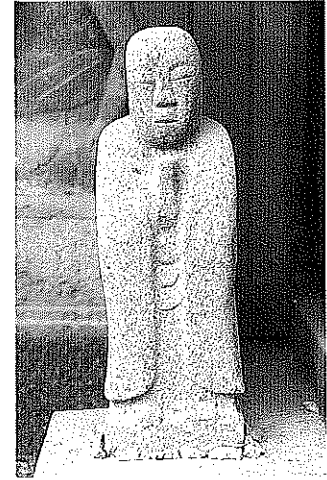
1-7 地藏菩薩



1-12 地藏菩薩



1-11 地藏菩薩



1-10 地藏菩薩



1-14 万壺塔



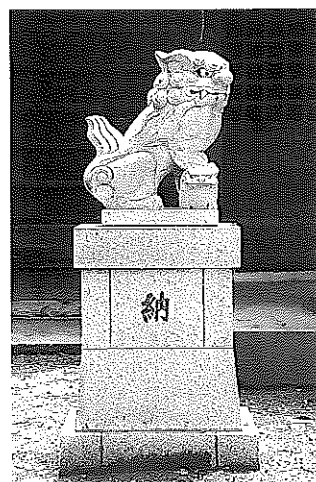
1-13 順礼供養塔



2-2 神社標石



2 見目神社境内



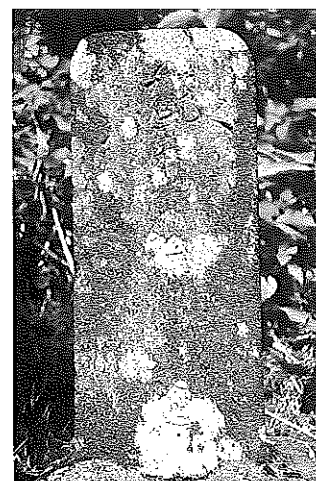
2-5 狛犬



2-4 狛犬



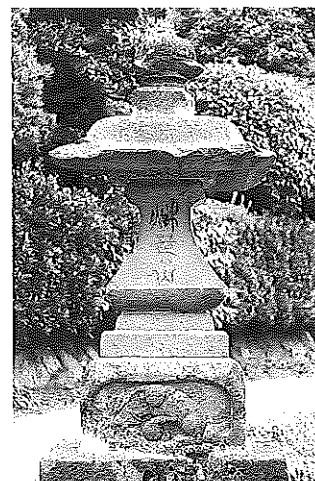
2-3 石灯籠



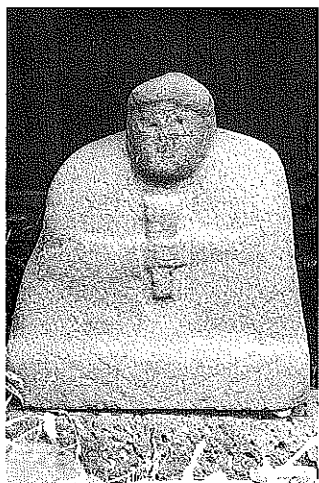
5 諸神（地神）



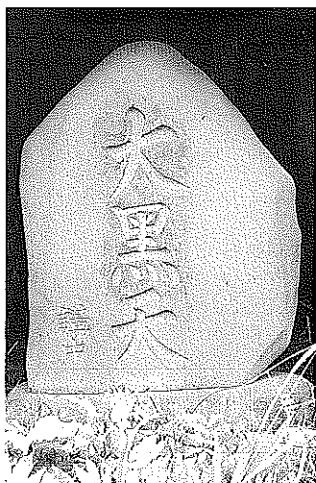
4 順礼、順拝供養塔



3 秋葉山供養塔（部分）



6-3 道祖神



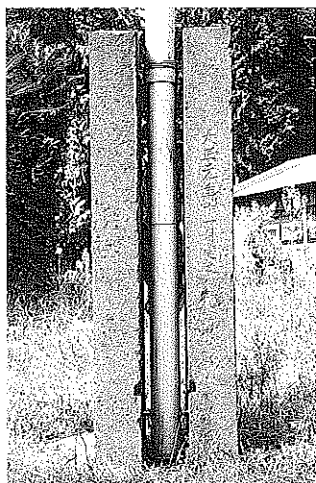
6-2 子待塔



6-1 庚申塔



7 馬頭観音



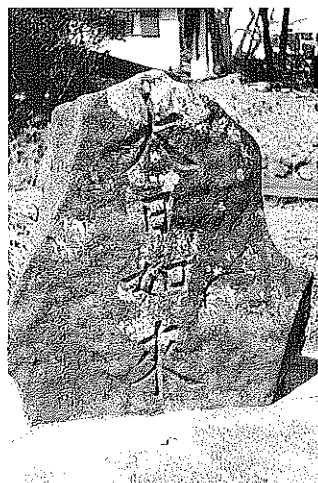
6-5 織建



6-4 石灯笼 (部分)



9 馬頭観音



8 大日如来



表塚地区石造物一覽表

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
1-1	寺院標石	自然石	昭和56(一九八一)	245×144	(正) 曹洞宗 東光寺 沙門侍元(花押) (背) 昭和五十六年五月吉日 當山法幢開闢第一世 宏峰道順代 寄進者峰下 高田衛 川喜石材店
1-2	廻国塔	自然石	寛政11(一七九九)	110×31	(正) 六十六部日本國諸願成就 天下和順 日月清明 寛政十一己未年 一月吉日 武州江戸 口道
1-3	馬頭観音	舟型立像		80×29	
1-4	聖観音	丸彫立像	文化9(一八一三)	48×13	(背) 文化九年 十一月十五日
1-5	地藏菩薩	丸彫立像		44×12	(頭部補修)
1-6	聖観音	丸彫立像		60×22	
1-7	地藏菩薩	丸彫立像		73×24	
1-8	地藏菩薩	丸彫立像	宝曆13(一七六三)	59×18	(右) 宝曆十三年 (左) 柏木弥太八

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
212	神社標石	角柱	昭和53 (一九七八)	304 × 44	(正) 見目神社 (背) 昭和五十三年十月妻塚氏子中
211	鳥居 (部分)			26 × 49	(龜服一對)
114	万霊塔	櫛型角柱	正徳5 (一七一五)	148 × 34	(正) 有無縁三界萬霊 (右) 施主 柏木基六 (左) 正徳五乙未夫二月三日
113	順礼供養塔 (横置)	丸彫座像	正徳1 (一七一二)	80 × 32	別記1 (286頁)  (如意輪)
112	地蔵菩薩	丸彫座像	延宝2 (一六七四)	98 × 43	(背) 奉造立地蔵 順礼供養為三界之願主 世安樂之者也 駿州妻塚村施主 勝又五郎左衛門 中野久右衛門 干時 延寶甲寅二月 仲秋 十月 謹 敬白
111	地蔵菩薩	丸彫立像		45 × 12	
110	地蔵菩薩	丸彫立像	寛政3 (一七九二)	50 × 13	(右) 寛政三亥 (左) 正月十七日
109	地蔵菩薩	丸彫立像		53 × 15	(背) 願主 了喜 蓮香

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
6-2	子待塔 (大黒天塔)	自然石	天保14 (一八四三)	97×67	(正) 大黒天 講中 (左) 天保十四癸卯年九月吉日
6-1	庚申塔	自然石	宝曆8 (一七五八)	128×90	(正) 庚申塔 (左) 宝曆八戊寅十一月吉日
5	諸神 (地神)	櫛形角柱	安政6 (一八五九)	60×13	(正) 奉請地神守護処 (右) 安政六年六月吉日
4	順礼・順拝供養塔 (西・四・横・善・秩・坂)	自然石	文政10 (一八二七)	129×52	(正) 奉納三百廿一番供養塔 西國四國横道 善光寺秩父坂東 (左) 同行入 高梨善石衛門 夕に (右) 文政十丁亥歳八月日
3	秋葉山供養塔	灯籠	天保15 (一八四四)	174×60	(正) 秋葉山 (左) 御祭燈 (背) 天保十五年 甲辰八月日 (火袋・中台見落)
2-5	狛犬		昭和60 (一九八五)	159×53	(台座正) 納 (台座背) 昭和六十年三月 飯塚止泰建之
2-4	狛犬		昭和60 (一九八五)	158×56	(台座正) 奉 (台座背) 昭和六十年三月 飯塚止泰建之
2-3	石灯籠	灯籠	貞享2 (一六八五)	188×48	(正) 御神前 奉納石塔籠 駿州駿河郡小泉庄 麥塚村各々願主敬白 干時貞享二乙丑年 十一月吉日

番号	種類	形状	造立年	法量 (cm)	銘文 (備考)
6-3	道祖神(単体)	丸彫座像		71×48	
6-4	石灯籠(部分)	灯籠	寛政2(二七九〇)	68×24	(正) 奉納石塔籠 (右) 施主講中 (左) 寛政二年 戌六月  (残存 竿・基礎部)
6-5	幟建		大正1(一九一三)	194×65	(正) 大正元年十一月建之
7	馬頭観音	自然石	昭和37(一九六二)	62×34	(正) 馬頭観世音 昭和三十七年四月 山田八百蔵建之
8	大日如来	自然石	寛政4(二七九二)	65×61	(正) 大日如来 寛政四壬子 二月吉日 飯塚善左衛門
9	馬頭観音	舟型立像	弘化2(二八四五)	59×23	(正) 弘化三年 二月吉日  (風化)

別記1 順礼供養塔(横堂)

(背) 卍

(台座右) 奉造立観音石像為横堂順禮供養施主敬白

(台座正) 麦塚村 飯塚権右門 同 由兵衛 ヲステ

ヲシメ 勝又庄右門 一月吉日

(台座背) 正徳元卯年 茶畑邑 市川四郎兵衛 姑岸

麦塚村



(台座位置相違)





## 石造物の種類別解説

経典供養塔（きょうてんくようとう）

経典供養塔には、経典の名称や经文、あるいは陀羅尼（だらに）（教  
法や教理を記憶し保持するために用いる呪文）を銘文にし  
た「刻経塔」、経典の読誦やその回数などを刻んだ「読誦  
塔」、経典の書写成就を記した「写経塔」、写経した経典を  
社寺に納経したり、地中に埋経したりしたことを刻銘した  
「納経塔」などがある。なぜこのような経典供養塔がつく  
られたのであろうか。

仏教では、その教えの中心となる経典を、維持し広める  
ことは仏教徒の務めであり、また修業そのものであるとさ  
れ、そうした仏教徒としての任務の遂行にともなう功德に  
は、計り知れないものがあるとされている。

仏教伝来当時、経典は文字どおり有ること難き希有の聖  
典であった。したがってその維持と管理（受持）は、防災  
の態勢も整わず管理の技術も発達していない時代にあつて  
は、まさに命がけの任務であつたし、また経典内容の維持  
管理も容易ではなかつた。すなわち、外国語としての経典  
を、一言半句違えることなく音読すること（誦）、これを  
暗誦すること（誦）、その意味するところをふまえて訓誦  
（解説）することは、いずれも一朝一夕になし得ることで  
はなく日常的修業を要するものであつて、容易ならざる業  
であつたのである。

また、仏法を世に広めるための経典の普及という面でも、

現在のような複写や印刷技術の発達していない時代にあつ  
ては、経典の増刷もままならず、一字一句書き記して経典  
を作成するという、最も手間のかかる筆写によらざるをえ  
なかつたのである。

このように経典の維持と普及が困難を伴うものであつた  
がゆえに、そうした仏教徒の任務遂行には深い充実感が伴  
う功德の高い行為とされたのであるが、やがて時の経過と  
ともに、逆に功德を得んがために経典を読み、誦し、写経  
するなどの宗教行為が生まれ、それが信仰行為として確立  
して今日に至っているのである。各種の経典供養塔はこう  
した背景の中から生まれたものであり、その大半のものが  
読・誦・書写（写経）の成就の際に建立されている。

### 刻経塔（こつきょうとう）

経典の名称や真言、あるいは经文の全部もしくは一部を  
塔に刻んだ石造物が刻経塔である。（本報告書では、刻経  
塔のうち当地方に数多く見られる名号塔および題目塔は、  
別に独立させて収録した。）

刻経塔が、どのような理由によって建立されたのか、す  
なわち経典保存のためであるのか、帰依する経典への信仰  
の表現なのか、あるいは読誦もしくは写経の成就完成を記  
念するものであるのか、必ずしも一定していない。

## 写経塔（しゃきょうとう）

経典を写すことであるが、それにはいくつかの目的や意味があるとされている。その一つは写経によって冥福を祈り供養すること、二には写経によって心の安らぎを得たり、功德を得られる、信仰を深めるといったほかに、経典を写経によって広めることや、写経したものを埋納したり霊地に納めて記念することがおこなわれている。

写経塔は銘文をよく読み、写経の目的、願主、関係する寺院、僧侶の名等を調査し、他の写経塔と比較検討することが必要であるとされている。

## 読誦塔（どくじゅとう）

経文を見ながら読むことを読経どきょうといい、経文をそらんじて唱えることを読誦どきょうという。また読誦とは書物や文章を声を出して読むことであり、読誦は経文を読むことをいう。

経典供養塔の一つの読誦塔は特定の経典を読誦したことを記念して建てた塔である。

経典は本来、読まれ広められるためのものであるが、外国語としての経典を誤りなく読み、そらんじて読めるほどに繰り返して読むこと、すなわち読誦が修業として重視されるようになった。やがてそれは、平安末期ごろになって、信仰の深さを量的に測る傾向が生まれると、読誦が何部、何遍、あるいは何日行われたかということが重視されるようになり、石塔に刻銘して読誦の完了を記念することも行われるようになったのである。

裾野市深良興禅寺にある読誦塔は、「因唱弥陀名號百万遍」と刻んであり、読誦という語は記されていない。「南無阿弥陀仏」を百万遍唱えたという記念塔であるがその読誦の圧倒的な量に、ただただ感服のほかない。

## 廻国塔（かいこくとう）

「奉納大乘妙典」「回国六十六部」「廻国」などの銘文のある石造物が廻国塔である。

この廻国塔は、経典供養塔のなかの、納経塔の一種と位置付けることができる。すなわと大乘妙典と呼ばれる法華経を六十六部写経し、わが国六十六カ国の霊場に一部ずつ納めて諸国を廻った記念塔である。法華経は八巻から成っており六十六部ということになると五百二十八巻の写経がなされており、これだけでも大事業である。

この廻国塔の建立の目的は、廻国成就を記念するものや、数年間に及ぶ廻国の大業の、志半ばにして不慮の死をとげた行者たちの供養のために造立されたものなどさまざまである。中でも、廻国してきた遊行僧（彼ら乞食僧は六十六部、あるいは六部と呼ばれた）に路銀を与え、霊場で先祖の供養を依頼したことを記念して建立した塔がもっとも多いとされている。

## 順礼・順拝供養塔（じゅんれい・じゅんぱいくようとう）

各地の神社仏閣、聖地霊場を訪れたり、参詣して回る民衆の順拝・順礼行為としては、伊勢神宮への参詣や善光寺



詣弘法大師ゆかりの地を回る四国八十八ヶ所めぐりなどがあるが、とりわけ観音信仰に基づく霊場巡りは民間信仰の中で大きな位置を占めるものである。

『法華経普門品』（『観音経』）の、観世音菩薩が三十三にその身を変えてこの世に現われ、衆生のあらゆる苦しみを救ってくれるという簡明な教えは広く民衆の心をとらえ、やがて、観世音菩薩を本尊とする三十三の寺を順礼するものには功德が得られるとの信仰が生まれた。

近畿地方一帯に点在する観音霊場に岐阜県華厳寺を加えた「西国三十三ヶ所」、関東地方のいわゆる坂東八ヶ国順礼の「坂東三十三ヶ所」、埼玉県秩父市および秩父郡の「秩父三十三ヶ所（西国・坂東・秩父を合わせて百にするため、後に三十四ヶ所となった）」といった、よく知られた全国霊場だけでなく、例えば「駿河・伊豆（両国）横道三十三ヶ所」「駿河一國三十三ヶ所」など地方霊場も各地に生まれさらに小さな地域霊場が数多く設けられた。

こうしたさまざまな三十三ヶ所観音霊場を順拝する各種の順礼が、江戸時代の経済発展とともに広く庶民の間で行なわれるようになり、困難をともなった順礼を終えると、かれらは多様な順礼供養塔を建立したのである。

裾野市の石造物をみると、観音信仰に基づく順礼供養塔が多いことに気付かされる。そこで本書では、その特徴を明確に示すために、観音信仰に基づく順礼供養塔を「順礼塔」と表わし、「遍路」と呼ばれている四国八十八ヶ所の順拝やその他の寺社霊場への参詣にともなう石造物を「順

拝塔として分類した。

また「巡礼」「巡拝」と今日表記されているものも、裾野における多くの石造物の刻銘にならって、本書でも「順礼」「順拝」と表記したことは例言に記した通りである。

#### 名号塔（みょうごうとう）

名号というのは阿弥陀如来をたたえる「南無阿弥陀仏」という言葉で、南無というのは「帰依する」という意味である。したがって名号の意味は「阿弥陀如来に帰依する」という意味になる。中国唐代の名僧善導大師（六一三〜八一）は、この名号の南無を願、阿弥陀仏を行とすると、願と行が共に具った六文字であるから、これを念じ唱える者は極楽往生できると説いた。この教えは平安時代のすえに末法思想、浄土信仰と結びつき、特に時宗を開いた一遍上人は、この名号を本尊としこれを唱えることによって、現世から救われるとして、名号を民衆に広めたとされている。名号塔は自然石または切石に「南無阿弥陀仏」という六文字を刻んだもので、多くは念仏講、阿弥陀講などの講中によって建てられている。特にこの地方に多い唯念名号塔については、次項で解説をした。

#### 唯念名号塔（ゆいねんみょうごうとう）

唯念は念仏専修の行者で、駿東郡小山町上野の唯念寺を創建したとされるが俗名は明らかでない。

「明治往生伝」によれば、寛政二年に熊本県八代郡の士



族の生まれとある。一七歳で下総行徳村の徳願寺の誓誉和尚の元で仏門にはいる。その後北海道にわたるが、誓誉和尚が特命により、岩槻淨国寺へ移ると、唯念は誓誉和尚のもとを離れ、恐山（青森県）、月山（山形県）、八王子高尾山などで修行を繰り返す。文政六（一八二三）年駿河国上野奥の沢（小山町）を訪れる。そして文政九年には、小山町菅沼に唯念の署名と花押の記された馬頭観音が建立されている。その後、富士山などでさらに修行を深め、天保六年に小山町上野奥の沢に念仏堂を創立する。

独特の文字で書かれた唯念名号塔は、静岡県東部地区を中心として、神奈川県、山梨県などで二六五見られる。年代の明らかなものでは、嘉永（二八）、安政（三四）、明治（二九）に集中し、この三者で七三%をしめる。地域別に見ると三島市（一四）、修善寺町（一一）、小山町（二七）、沼津市（二七）、裾野市（一八）、函南町（二〇）と沼津市

に特に多い。県別に見ると東部地区を中心とした静岡県が一三八と圧倒的に多く、神奈川県で二六、山梨県で一つ確認されている。

唯念名号塔は自然石を利用したものが多く、最大は小山町足柄峠下栗の木沢の四メートルで、裾野市の岩波駅前のもは二番目の大きさである。最も小さなものでは、七〇センチ弱の修善寺永松院の名号塔がある。

建立年代で見ると、馬頭観音に署名と花押を記した小山町菅沼の例を除くと、天保一四（一八四三）年の紀年号を持つ裾野市茶畑の願生寺境内のものが最も古く、逆に南足柄市千津島公会堂前の明治一八（一八八五）年のものが最も新しい。

裾野市の例では、茶畑の願生寺例が天保一四年で最も古く明治一二年の富沢例と切久保例が最も新しい。裾野全体では、嘉永年間のもの五例と集中している。

馬頭観音に唯念の花押などが見られる例は、先的小山町菅沼と御殿場二子の共同墓地参道にあるが、岸壁に彫り込まれた小山町奥の沢の奥行場例や裾野市下山神社裏例、さらに裾野市の願生寺例のように、名号と菩薩や如来像などが組み合わさったものとして、菲山寺家の光照寺門前例などがあるが、これらは唯念塔としては変わった例といえる。

唯念塔には正面中央の「南無阿弥陀仏」と、独特の文字で書かれた名号の左右に、菩薩像などをあしらったものと「天下泰平、国土安穩」などと書かれたものに大きく二分できるといふ（石井種生「唯念名号碑」一九九三）。これ

は極楽往生を希求した村人の願いとともに、雨ごいや疫病送りの祈願をよく示す民間信仰の表れとも考えられる。

裾野市佐野バス停前に設置された、二・二メートルの大きさの、安政四年と紀年された例などは、当時大流行したコレラに対する疫病払いが祈念されたものかも知れない。

沼津市静浦地区の同じような安政四年紀年の唯念塔は、当時猛威を振るったコレラの疫病払いを祈念してのものであったと言えられている。

唯念塔からは、そうした村人の素朴な信仰を読みとることもできる。

#### 題目塔（だいまくとう）

題目というのには、本来は經典の題号をいう。日蓮宗、法華宗などでは法華經のなかに釈迦の教えの真髓があると説き、法華經の題号の妙法蓮華經に南無をつけて、南無妙法



蓮華經とし、この七文字の題目を唱えて、法華經を身につけ広めることを行としたのである。

この題目の唱行は信徒のなかで、題目講という組織ができ、この講中の人々によって題目塔が建てられるようになった。この塔は自然石、切石に南無妙法蓮華經の七文字を刻んだものが多い。

#### 庚申塔（こうしんとう）

庚申というのは中国の曆で十干十二支の組合せにより、六十日目に回ってくる庚申の日のことである。中国の道教では、庚申の夜になると人体に宿っている三尸の虫が睡眠中に体から脱け出して天帝のところへ行き、その人の罪過を告げるので生命が奪われると信じられていたため、この夜は虫が出ないように徹夜で善行をし修業することが行なわれていた。このような庚申の夜の思想と修業が古代の日本にも伝えられ、宮廷や貴族の間で行なわれるようになったが、やがて中世後半には民間にも信仰として広まり、庚申待とか庚申講という集団で行なう行事ともなっていた。またこの頃から庚申供養の石塔を建てるようになったとされている。

一方、庚申を「かのえさる」と読むところから庚申を申待ともいい、猿の信仰と結びつき、猿を御使とする大津市日吉二社権現の信仰とも習合していったともされている。近世に入ると、庚申の夜は言葉や行いを慎むということから、孔子家語にある不言、不聞、不見の三緘、天台宗



にいう不見、不聴、不言の三諦と関連させ、両手で目と口と耳をふさいだ三猿と、その本地仏（本尊）青面金剛を庚申の守護とするようになった。

裾野市内の庚申塔は江戸時代の寛文の頃（一六六一〜七三）から建てられ、形は基盤、反花座、方形の塔身、笠、宝珠と組立て、基盤の台座または方形塔身の下部に三猿を彫り、塔身に供養の銘文を刻んであるものがある。そのほか自然石や切石に青面金剛像と三猿を浮彫したもの、あるいは庚申供養塔、庚申塔、青面金剛の文字を刻んだものなどがある。

青面金剛というのは、青い顔をした金剛童子で、仏法を護る童子の一つ。三眼六臂で忿怒の形相をし、病魔や病魔を払うのに大威力があるとされるところから、庚申信仰の本尊とされるようになったといわれる。

## 道祖神（どうそじん）

もともとは道路の悪霊を防ぎ、通行人を護る神であったが、古代日本神話にあるイザナギがヨミノクニにいったイザナミを訪ねた時、その怒りにふれて逃げる途中、追ってきたヨミノシコメを止めるため、投げた杖から生まれたというサエノカミと習合して、障の神あるいは塞の神とされる村の外つまり外界（ケ）と、内側の内界（ハレ）との境を守る神とされるようになったという。後世になると良縁、和合、妊娠、出産、幼児の守護を願い叶え、セキやシモの病などを直す俗信の神に変化したとされている。

石像には、単神体の立像または座像を丸彫にしたもの、自然石または切石の片面に、双体あるいは単体の神像を浮彫したもの、この浮彫石像には屋根形、舟形などがあり、面を円形、楕円形、屋根形、矩形に削りを入れ、神像を浮彫にしその削りの頂点に懸魚けぎょ、半菊花懸魚、逆三角形、雲



形などの装飾の彫を入れたものなどがある。また自然石や切石に道祖神と文字を彫ったものや、自然石、丸石を道祖神としたものもある。

#### 如来(によらい)

如来というのは、実体や真実をよく理解し体得して人間界のすべての迷いや苦しみを救ってくれる、最高の仏とされる。如来像はこのようなすべての悟りをひらいた仏の姿をあらわすものであるから、極めて簡素な着衣だけで、菩薩像にみるような装身具は身につけていない。頭髮は螺髪という頭髮をまるめた巻毛の粒にしたもので、その頂上を腕を伏せたような形に盛りあげている。額の中央に白毫という白毛をまるめた印をつけている。着衣はゆったりとしたもので、左肩から右下へ肩かけのような形の袈裟姿をしたものもある。

如来像には衆生を救う分担や役割あるいは教典の趣旨などによって、釈迦・阿弥陀・葉師・大日如来などがある。像としては丸彫の立像と座像、自然石や切石に立像や座像の浮彫にしたものなどがある。

ところで如来像は上半身がそれぞれよく似ているので区別が難しいが、釈迦如来は右手をひじのところで折り曲げ、手のひらの先を肩の線まであげて前を向け五指を伸ばし、左手はさげて手のひらを前に向けた姿をしている。釈迦三尊という場合は中央に本尊を据え、その左右両脇に文殊菩薩と普賢菩薩像を配している。このうち文殊は獅子に乗り左手に宝剣を持ち、普賢は象に乗って合掌するのが決まった形であるという。

阿弥陀如来は西方にあるとされる極楽浄土をつかさどる最高の仏とされ、その信者は死後極楽浄土に生まれ変わる

#### 子待塔(ねまちとう)

子待というのは、庚申と同じように十干十二支の組合せで甲子の日あるいは子の日に、大黒天を祭ることをいう。大黒天はもとインドのバラモン教の最高神シバの別名大自在天の化身であったが、仏教の守護神となり、さらに七福神の一つになった。日本では古代出雲の国神、大國主おおくにやしと習合して広く民間に信仰されるようになった。近世の農村では豊作をもたらす神と一体となり、人々は甲子講、子持講という組織をつくり、甲子の日、当番の家では大黒天を画いた掛軸をかけ、講中の人々が集まって祈願した後、飲食歓談するという娯楽の日でもあった。

石像で大黒天の丸彫、浮彫したものもあるが、自然石や切石に大黒天あるいは甲子塔と文字を刻んだものが多い。

#### 水神塔(すいじんとう)

水の神を祀った石塔で、神像を丸彫にしたものは少なく自然石や切石に「水神」、「水神宮」などと刻んだ文字碑が多い。水神に弁財天がまつられることは、弁財天の項で述べた。このほか龍も水神としてまつられる。

水神塔は用水池、用水路の分岐点、水源地、井戸などに建てられる。

ことができるといわれ、中世以後広く人々に信仰されるようになった(名号塔の項参照)。この像の座像の場合、両手のそれぞれの親指と人さし指の指先をつけ、以下の指を折り曲げて両指の背、つまり外側をつけた形をしているのが一般的な姿であるという。阿弥陀三尊の場合は本尊の左右両脇に観音菩薩と勢至菩薩を配し、観音は頭上に阿弥陀立像を乗せ、勢至は宝瓶をつけている。

薬師如来は字のように万病を治し寿命を延ばし医薬をつかさどる仏であるときれ、広く人々に信仰されている。この像は右手の肘のところから腕を前に延ばして手のひらを前に向け、左手に薬壺を持っているのが特徴とされる。薬師三尊の場合は左右両脇に日光、月光菩薩を配し、それぞれ内側の手に日輪と月輪の形をつけた持物の柄を握っている。大日如来は全宇宙を仏としたもので、その威力は日の神の上に立つところから大日如来といわれている。この像は他の如来像と異なり、頭に宝冠をかぶり垂れ飾りをつけ、胸の前で左手の人さし指を右手で握る姿をしている。また別に両手の親指の先端を合わせ、他の指を重ねたものもあるが、数は少ないとされている。大日如来には三尊像は見られない。

### 寢釈迦(ねしゃか)

涅槃像のことで、釈迦が八十年の長い説法を終えて、クシナガラというところの沙羅双樹の下で、北を枕に西を向いて右脇を下にし身を横たえ、涅槃に入ろうとする姿をあら

わしたものだ。涅槃というのは、絶対自由となり永遠の至福の状態をいい、後に釈迦の死をいうようになった。

裾野市滝頭の寢釈迦像は類例がなく珍しい石造物である。

### 観世音菩薩(かんぜおんぼさつ)

この仏は人々のすべての願いごとを聞き、それをかなえ苦しみを救ってくれるというので観世音といい、それに応ずるように三十三の姿をしてこの世に現れる。これを三十三観音といって平安時代以来から、西国、坂東、秩父などに、これらの観音をまつる霊場ができた。この地方でも横道三十三観音という霊場ができて、観音信仰の対象となり、集団でそれらを巡拝したという供養塔が多い。

この三十三観音のなかで聖観音といわれる観音が最も一般的なもので、その姿は頭上に阿弥陀如来の化仏を配した宝冠を乗せ、左手に蓮華の茎を持ち、右の手のひらを蓮華



の花にそえる形のものが多い。

また餓鬼、地獄、畜生、修羅、人、天の六道で人々の苦しみを被ってくれるという六体の観音があり、これを六観音といって、古くから信仰されている。この六道のうち餓鬼道には聖観音、地獄道には千手観音、畜生道には馬頭観音、修羅道には十一面観音、人道には准提（または准胝）観音、天道には如意輪観音が配されている。天台宗では人道の観音に不空絹索観音を配する。

これらの観音像を簡単に説明すると、聖観音は前述の通りであるが、千手観音は頭上に九ないし十面の仏面を乗せ、千本の手をつけるものもあるが実際には合掌体で両側に二十の脇手を合掌の下に宝珠を乗せた手を置く例が多い。馬頭観音は別項で説明したのでここでは重複をさけ、次に十一面観音は頭上に菩薩面が三つ、忿怒の面が三つ、牙上出相という牙が口の両端から上に向かって出ている面が三つと、後の中央に大笑する面を置くものをいう。准提（准胝）観音は三眼で左右に九本ずつの脇手を出し、それぞれにいろいろの持物を持つている。不空絹索観音は頭上に阿弥陀仏の化仏をつけ、額に豎の一眼があり、合掌するが左右に三本ずつの脇手があり、その脇手の一本に衆生を救う慈悲の索つまり絹索を持つているのが特徴となっている。如意輪観音はふつう六本の脇手をもつものと二本のものがあって、右膝を立て左膝を折って坐り、右手を頬にそえる形をしているのが特徴である。石造には丸彫のものと、切石を舟形又は花卉形、丸屋根形などにし、内側に浮彫した

ものがある。一体で独立して祀られているものと、六体、三十三体並べて祀られているものなどがある。

#### 馬頭観音（ばとうかんのん）

読んで字のように、頭の上に馬の頭を乗せた観世音菩薩で後述の六観音の項で述べる六道のうち、畜生道で人々の魂を救う観音である。一般には馬と生活するなかで、馬持ちや馬に関係する職業の人々に信仰され、馬の供養や無病息災を祈願する目的で建てられている。造立された所は、馬捨て場、峠や山道の難所、集落のはずれ、道の分岐点のほか、馬の死んだ所や馬主の屋敷内などがあるが、現在裾野市の場合、道路の拡張や整備などで、一ヶ所にまとめられたり、原位置から移されたりしている例がある。

石像は切石を舟形にして、頭上に馬頭を乗せた観音を浮彫にしたもの、同じく忿怒の面相し三面六臂（正面と左右



に顔面を向け、六つの脇手を出したものを、手に蓮華、瓶、鉢、弓、鏃、雁などを持つものを浮彫りにしたものの、自然石や石塔に馬頭観世音菩薩の文字を刻んだものがある。市内では江戸時代中頃より戦後のものまであって、数の多い石造物の一つである。

### 地藏菩薩（じぞうぼさつ）

本来は、釈迦の死んだ後に弥勒菩薩が現われるまでの無仏の間に、この世に現われて人々を救つてくれるという仏であったが、日本では平安時代中期以後、浄土信仰と末法思想が合わさって、生前の所業や因縁によって生死をくり返す六つの迷いの世界、つまり六道から、その苦しみを救い福利を与えてくれる仏と信じられ、人々に広く信仰されるようになった。近世に入ってから民間信仰と結びつき、火よけ、盗難、病氣、怪我、厄よけ、身代り、安産、子育てなど、人々のあらゆる願いをかなえてくれる仏として信仰され、地藏講という信仰集団も成立した。

地藏菩薩像は、一般には円頭が特徴で右手に錫杖しやくじょうを左手に宝珠を持つ姿が最も多く、両手を胸のところこゝろで合わせた合掌がこれにつぐ。切石に丸彫にしたものと、切石を舟形または花卉形にして、内側に浮彫にしたものがある。立像が多く座像または腰掛けて片足をまげたいわゆる半跏趺座像もある。

本報告書では、明らかに個人の墓碑として建てられたものと墓地内にあるものは採録しなかった。

### 六地藏（ろくじぞう）

地藏菩薩が六道をめぐるって転生する衆生（人々）を救うというところから、六種類の地藏を信仰の対象にしたもの。六種類の地藏をどのように考えだしたかについては諸説があり、また持物や指の組み方にも違いがある。近世の六地藏は、仏像絵図からとったものが多いとする。

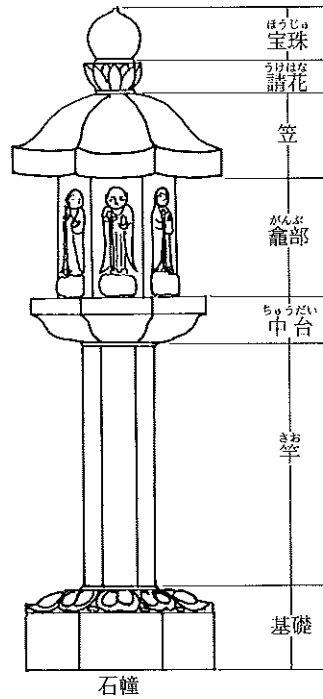
石造の六地藏には、丸彫にして六体を並べたものが最も多く、切石を舟形または花卉形にして内側に浮彫にしたものを六体並べたもの、二石に六体浮彫にしたものなどがある。また六角形の石塔の各面に六体の地藏を浮彫にしたものを六地藏石幢または六地藏幢と呼んでいる。

仏像絵図からとったという六地藏のうち、両手に数珠を持ったものが地持地藏、右手の五指をそろえて肩の高さまであげ、手のひらを前にむけ、左手はさげて手のひらを前にし、若干指をまげたものが陀羅尼地藏、両手を胸の位置で合せた合掌形のものが宝性地蔵、右手に錫杖、左手に如意の宝珠を持ったものが鶏龜地藏、両手で柄のついた香炉を持ったものが法性地蔵、両手で旗（幢幡）を持ったものが法印地藏とされている。

### 石 幢（せきどう）

石幢というものには六角柱または八角柱の幢身を本体として、基礎、幢身、笠、宝珠と組みたてたものと、基礎、反花座、六角ないし八角の塔身（竿）、中台（うけ）、龕部、笠、宝珠と組みたてたものの二形式があって、前者の幢身





または後者の龕部に仏像、主に六地藏尊を浮彫したものが  
多い。石幢は幢身に経文を刻んだ経幢といわれたもので  
あったが、本来は石幢自体が仏身であって塔婆であったと  
いう。

幢というのはたれ幕のことであるから、六角形ないし八  
角形の枠組に宝珠のついた笠をのせ、各柵面にたれ幕をつ  
けた中に仏像を祀ったものがあつたのではないかと思われ  
る。また龕というは仏像を納める厨子のことである。

### 不動明王 (ふどうみょうおう)

明王というのは、大日如来の命令を奉じて忿怒の形相を  
し教化のむづかしい衆生やいろいろな悪さをする鬼など  
を、説得し降伏させる仏という。また大日如来の分身とも  
いわれる。この明王のいちばん代表的なものが不動明王と  
され、火炎のなかにあつてすべての罪障(成仏のさまたげ

となる障害)を打破り、動揺しないので不動といわれてい  
るとされる。不動明王には八大童子(矜羯羅、制吒迦、慧  
光、慧喜、烏俱婆迦、清浄比丘、阿耨達、指徳)が付属  
しているが、ふつうには矜羯羅と制吒迦の二童子がついて  
いるものが多い。この明王は本来の教え救済のほか、  
病氣治癒、安産、水神、防災(水害・火災)、怨敵降伏、  
財福を得るなど諸願をかなえてくれる仏として広く信仰さ  
れ、不動講という講もつくられている。

石像には丸彫一体のものと童子を従えた三体のもの、切  
石を整形してその内側に浮彫にしたものがあるが、背に火  
炎を刻し右手に剣左手に絹索を持つ姿が特徴となってい  
る。

### 弁財天 (べんざいてん)

大弁財天女、妙音天、美音天のほか大弁財功德天ともい  
われ、略して弁財天、弁天様ともいわれている。もとはイ  
ンドの河の農業神として尊敬され、後に仏教にとり入れら  
れて音楽や智慧の神となり、日本では中世以後に七福神の  
一員となつて、福德の神として広く信仰されている。

姿かたちは天女形で、一般には琵琶を持っているが、本  
来は八つの脇手があつて、弓、箭、刀、稍(騎兵の持つ矛)  
斧、長杵、鉄輪、繩索を持つ。もともと川の神、農業神と  
いう性格から灌漑に關係する用水池、沼、用水源となる川  
などの岸边に水神として祀られる。石像には丸彫や切石に  
浮彫として刻まれる。

## 羅漢（らかん）

阿羅漢の略で、悟りを開き功德がそなわり、尊敬や供養を受けるに価する修業僧の最高位の称号。

このなかで十六羅漢というのは仏の命で、長くこの世にとどまって仏法を護るといふ、寶頭盧尊者次下十六人の尊者をいう。

五百羅漢というのは、釈迦の弟子で阿羅漢の称号を受けた聖者をいい、釈迦の死ぬ時にその傍らに結集し、その教えをまとめるため、それぞれの道に向かったとするが、個々の名前や事跡は明らかでないという。

羅漢像は丸彫座像が多い。

## 日天・月天（にってん・がってん）

仏教で上下、日月、四方、四維を守る神々の一つ。梵天（上）、地天（下）、日天（日）、月天（月）、帝釈天（東）、水天（西）、焰摩天（南）、毘沙門天（北）、水天（東南）、羅刹天（西南）、風天（西北）、伊舎那、大自在天（東北）の十二天の中にあつて、日天は日天子の略号で日宮殿に住み、帝釈天の内臣とも観音菩薩あるいは大日如来の化身でもあるという。月天は月天子の略号で月宮殿に住み、春夏秋冬を照らすという。裾野市のものは自然石に文字を刻む文字碑である。

## 鳥居（とりい）

神社の参道入口に建てて、神域を示す石造物であるが、

本来は本造で皮つきの掘立柱を左右二本建て、上に笠木を渡し、その下に間隔をあけて左右の柱を連結する貫木を入れたものである。

鳥居には三つの形態があつて、その一つは二本の柱を左右垂直にたて、それに笠木をのせ貫を連結させるが、両端を柱の外に出さないもので、神社名の額を中央にかかげない。これを神明鳥居といい最も古い形で簡素なものである。次は二本の柱を転びといつて左右内側に傾けて建て、笠木の両端を上にもそらしてその下に鳥木という受け木を入れ、貫が左右の柱の外に出したもので、鳥木と貫の中央に神社名を書いた額をかかげる。この鳥居を明神鳥居という。この明神鳥居の笠木を受けの鳥木の全体が大きく反り上がった形の鳥居を稲荷鳥居という。

神明鳥居は伊勢神宮や鹿島神社に建てられ、明神鳥居は春日神社、八幡神社に建てられた形式とする。

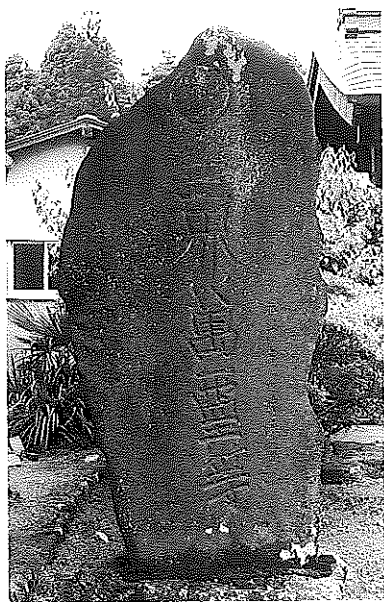
## 境界石（けっかいせき）

寺院の境域を示す標識の石塔を指し、寺院寺域の一切の支配を排除し独立不入を示すためのものとされる。禅宗寺院の山門に建てられている「不許葷酒入山門」の文言を刻んだ石塔も境界石といっているが、別にこれを戒壇石あるいは禁制石といつて、仏道修行のさまたげになる酒食は入れないことを示すためのものであるという。

## 万霊塔 (ばんれいとう)

仏教では、この世のすべてのものに霊(万霊)があり、この万霊を一つの塔に宿らせ、この塔を回向(えこう)することによって万霊を供養することができる。万霊塔というのは、この目的で建てられるので、寺院の門前、境内などの人の目につき易いところにある。

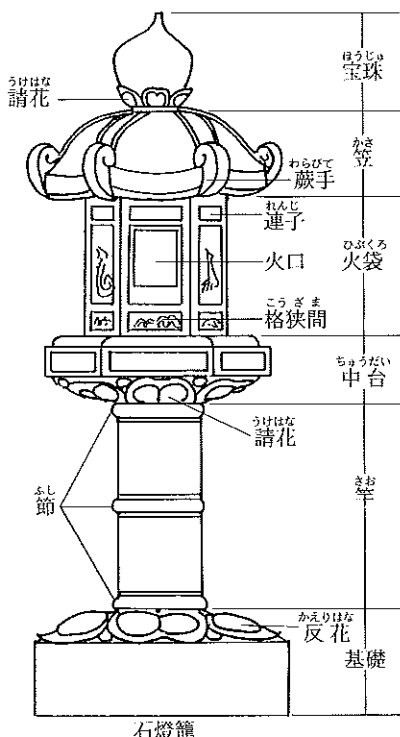
自然石や切石に「万霊塔」と刻まれるが、「三界万霊塔(等)」「法界万霊塔」と刻まれたものもあり、意味や内容は同じである。三界というのは欲望のはげしい欲界(六道の地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天)と、欲界ほどではないが、微妙な形のある色界と、そして形をはなれて心だけがある無色界の三つの世界を指し、一切のものが生き滅びし流れ転ずる世界であるとされる。法界も三界と同じ意味があるという。また十界というのがあるが、十界とは地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天上界に声聞界、



縁覚界、菩薩界、仏界の加ったもので、天地宇宙いっさいの世界をさすとされている。

## 石灯籠 (いしどうろう)

石造で社寺の前にすえて燈火をともしもの。上から宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎の名稱があり、それぞれの各部位に装飾的彫刻を施す。祈願のため奉納されたものが多い。



## 常夜塔 (じょうやとう)

道路の傍、交差点・集落の入口などに設置され、常夜、灯をつけ夜の歩行を便利にした燈籠。火伏の神の秋葉信仰と合体し、塔部に秋葉山常夜燈と刻したものが多い。宝珠・笠・火袋・中台、中台を支える竿部が方形で、下部の基礎に向かって広がり安定感がある。

手洗石（ちようずいし）

神社の参道わきに置かれてあるもので、自然石または切石の上面をうがって水を入れ、参拝者の手を洗って清めるようにしたもの。氏子あるいは信者の奉納したものが多く。



層塔（そうとう）

屋根を三、五、七、九、十三と奇数に重ねた石造の塔を層塔と呼んでいる。普通には四角形であるが、六角形、八角形のものもある。構造（形態）は基壇を据え、その上人格狭間を入れた基を置き、塔身（層となった屋根部）、笠、伏鐘、請花、層輪、宝珠の順となっている。

層塔は仏教でいう塔婆で、本来は仏舎利を納めたものであったが、転じて経典を納めたり仏像を塔芯に安置するようになった。近世、造塔者は主として祈願や供養塔のために建てたものもある。

佐野原神社本殿後ろにある層塔は、この地で戦死したという二条爲冬の霊を供養するために建てられたものであるといわれている。

## 字体について

石造物の調査で刻まれた文字を読み記録することは、最も重要な作業の一つであるが、風化し磨滅して判読できないものがあるほかに、一般の漢和辞典にはない文字があつて、読めない場合がある。

そこで調査現場ではその文字を刻まれた通りに写し取つて持ち帰り、石造物の調査、研究書、或いは石文字体の研究書などに記載された判読字体と照合して読むことになる。このように石造物に刻まれた文字で、漢和辞典にない文字や、一般には使われない文字を異体文字と呼んでいる。

異体文字は金石文に使われていることが多いが、裾野市内の石造物に刻まれた異体文字をみると、本字つまり元の原字体を省略したり、簡略化した字が多い。これは石工が、使用した石の質の關係から原字体では刻みにくいか、欠けてしまふとか、或いは手間がかかるという理由で、省略、簡略化した字を刻んだのではないかと思われる。特に硬質の玄武岩を用いた石造物の字体をみると、画数を省略した文字がよくみられる。

本報告書作成の過程で、衆を典、示、歸(婦)を飯としたものなどを異字・應を応としたものなどを略字、大庭氏を大葉、瀬戸氏を勢戸としたものなどを換え字とし、これらのなかで読めないものは当用漢字に直した。旧漢字でも一般に読めるものはそのままとしたが、特に読みにくいもの、それから行書体の字、草書体の字、くずし字などは、印刷の關係上、当用漢字とした。異字、略字、換え字などの一覧表は下巻末尾に記載することにした。

### 引用参考文献

- 石田茂作「仏教考古学論改」二、四 恩文閣 昭五二  
「日本考古学講座」7 歴史時代 河出書房 昭三一  
倉田文作「仏像のみかた」第一法規出版KK 昭五四  
庚申懇話会編「日本石仏辞典」第二版 雄山閣 平五

## 裾野の石造物の周辺

### 信州高遠石工と民衆の心

駿東地方に、遙か信州高遠より赴いた職人の手になる石造物が、何基もある。裾野市域においては、今のところ七基が確認され、その内、本巻には、深良切久保「名号塔（祐天名号塔）」（46―2）、「裾野の石造物点描」115頁参照）・同震橋「石橋供養塔」（81―4）・茶畑滝頭「不明の石造物」（7―17）・同峰下「庚申塔」（61―2）の四基を収載している。

高遠石工（石切）といっても、その場合の高遠は旧高遠藩領全体を意味し、現在の長野県上伊那郡高遠町よりかなり広範な範囲を指す。とはいえ、その中でもとりわけ多くの石工を輩出したのは、高遠町に属する旧入野谷郷・藤沢郷である。これらの地は、山深い信州にあっても、さらに山懐に抱かれている。

この高遠石工について伊那谷の先学の研究を参考としつつ、若干の説明を附したい。

その確実な先蹤は中世ともされる。天正の末には、徳川家康の命により、江戸築城に貢献したと伝えられ、その後、東北・関東・東海・近畿など各所で活躍した。幕末にあっては、外圧に対処して造られた品川の御台場（砲台）普請に従事した。

近世中期頃には「作間」、すなわち農閑期を利用した出稼ぎが多かったが、後期にはかなり恒常化していたらしい。



盛秋の藤沢谷

文化八年（一八一二）七月「藤沢郷石切仲間相州新丁場差止願」（『長野県史』近世史料編 第四卷一）に依れば、「仲間申合」に違背した儀兵衛とその一類に対し、処罰がなされ決着しているが、その中に「職分」という文言が見える。この場合のそれは、旅稼ぎの感覚を超えた、職業意識の顕在化を示すものであろう。また、文政元年（一八一八）十月の向山民吉の愁訴状においては「私共職分」「職分之猜（ねたみ）」など、顕著な「職分」意識を看取することができる（『高遠町誌』上巻・歴史二）。

「高遠地方旧記」（『高遠史料叢書』巻一）によれば、石工には本石切・石切弟子・石切目切・作間石切・作間目切の五種の別が見られる。高遠藩は相応に運上金を課した。

石工に対する統制は次のようである。出向に際して石工は「請人」、すなわち保証人をたて、また、仕事先での喧嘩・口論・博打を始め、迷惑を国元にかけてない旨、村役人に一札を入れた。さらに高遠藩は、同職者の中から「職人（石切）目

付」を選任し、監督させた。そして、同藩から支給された仰々しい由緒書を持ち、赴いた先では「大屋」「定」「定宿」などと記録に残る決まった場所に止宿した。さらに、例えば明和四年（一七六七）正月の「水上村石切出稼人書上帳」（『長野県史』同）には「御公儀様より仰せ付けられ候御法度之義は申し上ぐるに及ばず、常々仰せ付けられ候御法度、先々にても相背き申す間鋪候」とあり、地元にある時と同様、仕事先においても法度を遵守するよう戒められていた。

高遠石工が興隆した理由としては、まず、耕地が少なく農耕だけでは生計が立たず、一方、石工は道具があまり必要ない上、稼ぎが良い、といった事情が挙げられる。加えて、財政不如意の高遠藩にとって、出稼ぎによる運上金は大切な収入源であった。これらは経済的側面からの指摘である。また、自然的条件として、高遠石または青石と呼称される良質の石材を産したことも寄与した。さらに、社会的背景として、庶民信仰における石造物造立意欲の昂揚に伴う、需要の増大もあったろう。以上が関連、融合することにより、徐々に伝統が形成され、またそれが継承されていったものと思われる（『高遠町誌』同 参照）。

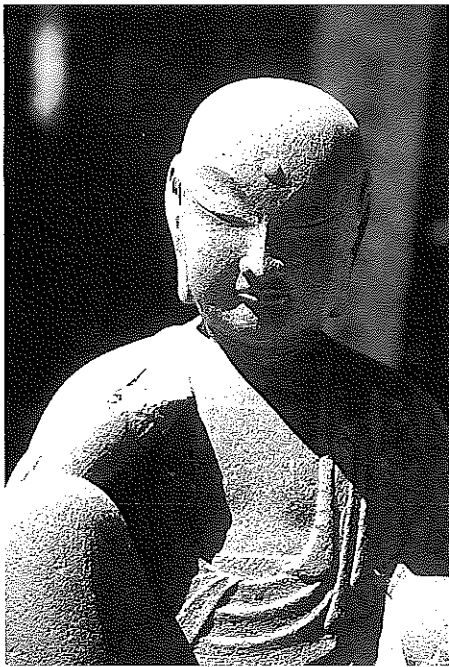
しかしこれまでの評価は、高遠石工の経済的困窮の側面がやや強調され過ぎているように思われる。その危うさについては既に指摘がある（北原真人「高遠石切」について・『伊那路』一〇五号参照）。いわゆる出稼ぎ根性であったは、高遠石工の声価はあり得なかったろう。確かに経済的事由は重要であるとしても、それに偏し高遠石工の輪郭を歪めてはならない。

高遠と似かよった風土で、同様に困窮していた地域は他に幾多も

あった。そうした中であって、なぜ高遠石工は信を得たのだろうか。それは、次の問いかけとも連なる。仏像の美といっても多様である。豪快と評されるものもあり、峻烈と讃えられるものもある。高遠石工の作品は、多くの人々にきめ細やかで、情緒豊かとの印象を与えらるらしい。もしそうであるとすれば、その由縁は何なのであろうか。これらの設問は、歴史的過程の中で高遠石工はどの様な精神世界を形づくっていったのか、という命題に帰趨する。

しかし、その答えを見いだすのは困難である。石工等はその心情を書き留めた史料を殆ど残していないからである。

ここで、手掛りとして石工守屋貞治を挙げたい。彼の作品は裾野市域には一基も確認されていない。しかし、数々の名工を輩出した藤沢谷塩しぎに生まれ、高遠石工の最盛期ともいえる文化から天保にかけて活躍した人であり、その思念を明らかにすることは、高遠石



守屋貞治作地藏尊  
（長野県諏訪市温泉寺）

工が通有していたであろう精神を理解するに資する。

貞治は彫仏の折、経文を唱え、香を焚いたという。愛用の香炉、数珠が現存する（高遠町誌編纂委員会編『石仏師守屋貞治』参照）。解脱をも感じさせるこの崇高さは、幼少時よりの度重なる肉親の不幸をはじめ、苦惱の果ての境地であったと推察される。

また貞治は、自己の作を一体ごとく書付け、「石仏細工留帳」（長野県史）同）として残した。それは、崇高さを後背とする、作品に対する自負心の現れであろう。

全ての石工に貞治ほどの境涯を見いだすのは困難かもしれない。しかし、自らの作品に「信州高遠石工（姓名）」と刻印した気概は、貞治の自負心と相似しよう。

しかし他面、彼は人生の機微を解さぬ超絶の人ではなかった。洒脱で、世俗に通暁した姿がうかがわれる。文政十一年（一八二八）、河崎（三重県伊勢市）の宝珠院に地藏尊造立のため、長途した。造立は、崇敬する温泉寺（長野県諏訪市）の住職願王和尚の懇望によるものである。駿東の人白隠は、臨済宗妙心寺派の高僧として知られるが、願王和尚はその孫弟子に当たる。ところで、その道中を記録した「旅日記」（前掲『石仏師守屋貞治』にある写真版参照）が現存し、三月十二日には「富田村（三重県四日市市）にて一やすみ、焼はまぐりか名物、はまぐりを焼は遊女か飯もりか 口をひらひて客をまつかさ」と記され、卑俗な観察眼が示されている。高遠石工の中には、石仏の台座に、まぐわいの姿をさり気なく刻しているような者もあり、相通ずる。

「旅日記」はこの他、世情の姿態を巧みに詠み込みながら、よどみなく筆録されている。そこからは、世俗に生きるものとしての貞

治の生きざまが、そこはかとなく伝わってくる。他の石工等が、通俗の人々であることは、縷説を要しない。

「旅日記」に続く丁は、次のように綴られ、著名である。

「夫（それ）より段々思ひ、しあんなそめくらし、色々と工夫をなし、誠二けふの御勤而已（のみ）斗、外に何と思ひ付事もあらむこそ、唯けふ、晨（あした）を勤、けふの日行斗」

これは貞治自筆ではなく、家人の手になるとされるが、貞治の思念の要諦を伝える箴言である。貞治は生涯に三百数十基に及ぶ作品を残したと言われる。しかもその各々に稠密な配慮がなされている。しかしそれは彼の意識の中では、ささやかな日々の勤勉の積み重ねにしか過ぎなかった。このひたむきな謙讓が貞治の日常であった。

崇高と卑俗、自負と謙讓、これらの微妙な均衡が貞治の精神世界であり、その上に創出された結晶こそ彼の石仏であった、と仮説したい。そして彼には及ばぬまでも、高遠石工と言われる人々の姿もそこにあつたと考えられるのである。

一般に、木仏が伽藍に納められるのに対し、石仏は野ざらしである。それだけに路傍に佇む石仏には、庶民の願望がより直截に表現されていると言えるかもしれない。近世民衆の祈願の内訳を中世と比較すれば、来世における極楽往生が希薄となり、現実化、即物化したと想定し得るのではあるまいか。それは、高遠な理念に基づくとは言いがたくとも、それなりに崇高で切実であり、かつ卑近で素朴な願望の、正直な披瀝とすることができよう。高遠石工の姿は恐らく、民衆の精神世界に深遠な位相で照応するものであつたらう。

そして高遠石工は、その深みから民衆の心の真髓をすくい上げ、現実の存在として昇華する術を心得た人々であった。だからこそ彼ら



は広範囲に、持続的に展開し得たと考える。

石仏は、多くの厳しい現実の中で、一瞬のきらめきのように石像物を造立した民衆自身の写し絵である。すなわち、高遠石工とは、近世後期民衆の心を石材に刻印し、今に伝える、語りべなのである。

(伊 東 誠 司)

## 編集後記

石造物調査は昭和六十三年より開始をし、その間紆余曲折がありましたが漸く報告書発刊の運びとなりました。

石造物といっても、道祖神、供養塔、道標等市内には多数の石造物が有り、これら全ての石造物を一冊の本に網羅する事は非常にむずかしく困難な事でもありました。しかし、市内に点在する石造物を一体残らず皆様に報告したいとの考えのもとに上巻、下巻と分けて発刊する事に致しました。

上巻は岩波・深良・久根・公文名・稻荷・茶畑・平松・麦塚地区とし下巻は残りの地区と致しました。

利用者の利便性を考え各地区毎に分け地図上に石造物の位置を記し、目で見ると重点を置いた写真掲載の編集と致しました。一体の石造物でも、先人の方々が、信仰の心、感謝の心を持って建立した物であり、市民全体の宝としてこれら石造物を残し、記録を残し大事にしていく事が肝要な事と思われれます。

調査に当たりましては、道案内をしていただいた方、あらかじめ雑草を刈っておいていただいた方など、地域の方々の多大な御協力をいただきました。特に記して謝意を表したいと思います。また、中野国雄専門委員を始め調査委員の先生方には酷暑・酷寒の中での調査、又工事等で移動してしまう物、風化して字の読み取りができない物、確認作業等ができない物等大変な苦勞があった事と思えます。末筆ではございますが梶野高等学校郷土研究部の皆様には並々ならぬ御協力をいただいた事と感謝を申し上げます。

梶野市教育委員会・市史編さん室長 藤 森 秋 親

裾野市史編さん室関係者

◆市史編さん専門委員

- 有光 友学 横浜国立大学教授
- 高橋 敏 国立歴史民俗博物館教授
- 中野 國雄 日本考古学協会会員
- 福田アジオ 国立新潟大学教授
- 四方 一瀾 国士舘大学教授
- 安田 常雄 国立電気通信大学教授

◆市史編さん調査委員

- 岩崎 信夫 都立目黒高等学校教諭
- 坂本 紀子 早稲田大学大学院博士課程
- 湯川 郁子 一橋大学大学院特別研修生
- 西川 尚男 沼津市立長井崎中学校教諭
- 岩田 重則 早稲田大学大学院博士課程
- 厚地 淳司 静岡県立沼津東高等学校教諭
- 井口 俊靖 加藤学園暁秀高等学校教諭
- 菊池 邦彦 都立航空工業高等学校校助教諭
- 柴 雅房 静岡県立沼津城北高等学校教諭
- 関根 省治 静岡県立富士宮北高等学校教諭
- 東島 誠 東京大学大学院博士課程
- 松崎 真吾 神奈川県地域史研究会会員

◆地区協力委員（ ）内は市内地区名

- 仁藤 敦史 国立歴史民俗博物館助手
- 伊東 誠司 一橋大学大学院博士課程
- 石田 義明 静岡県立非山高等学校教諭
- 瀬川裕市郎 沼津市歴史民俗資料館学芸員
- 新谷 尚紀 国立歴史民俗博物館助教授
- 杉村 齊 三島市郷土館館長
- 斎藤 弘美 日本民俗学会会員
- 松田香代子 日本民俗学会会員
- 宮村田鶴子 日本民俗学会会員

- 植松甲子男 西地区 (石脇)
- 杉山 光正 " (佐野)
- 加藤 信雄 " (大畑)
- 水口 清文 " (二ツ屋・新田)
- 歌崎 久作 " (定輪寺)
- 田口 勝夫 " (富沢)
- 水口 忠栄 " (伊豆島田)
- 関野 政雄 " (水窪)
- 中西 保男 " (二本松・新田)
- 杉山 繁雄 東地区 (久根)
- 藤原 善次 " (稲荷)
- 清水 四郎 " (茶畑)
- 芹沢 文 " (茶畑)

飯塚	政高	東地区	(麦塚)
星野	直司	〃	(平松・新田)
大庭	三郎	深良地区	(深良・南堀)
倉沢	秀雄	〃	(深良・町震)
小林	秀年	〃	(深良・上須)
長田	稔	〃	(深良・新田)
高橋	利治	〃	(深良・原)
一之瀬	和雄	〃	(深良・切遠)
藤森	茂良	〃	(深良・上原)
増田	一男	〃	(深良・和市)
西島	秀雄	富岡地区	(千福)
西島	義禮	〃	(千福)
土屋	誠吾	〃	(御宿・新田)
勝又	茂美	〃	(御宿・入谷)
勝又	秋男	〃	(御宿・上谷)
勝又	常一	〃	(葛山)
芹澤	正己	〃	(葛山)
柏木	仁	〃	(上ヶ田)
杉本	隆彦	〃	(今里)
真田	林蔵	〃	(下和田)
杉山	末雄	須山地区	(須山)

◆事務局

芹澤	仁	教育長
横山	哲也	教育次長
藤森	秋親	市史編さん室長
中村	恒之	主幹
中野	鈴子	主席主査
亀崎	浩子	主事
瀨田	明	事務職員
永野	武信	事務職員
泉谷	美保	事務職員
今関	裕美	事務職員
山本	けい子	臨時職員
藤本	政子	臨時職員
井原	貴子	臨時職員
長田	文代	臨時職員

◆調査協力者

長谷川	博
野村	美穂子
勝又	仁美
窪田	紀子
鈴木	康代
勝又	治枝

山之内マス子

山人アヤ子

境野 仁子

県立裾野高等学校郷土研究部

裾野市史調査報告書第六集

裾野市の石造物

平成七年三月二十五日

編集 裾野市史専門委員会  
発行 裾野市教育委員会市史編さん室  
裾野市茶畑三九九  
電話 〇五五九一九三―七七〇

印刷 みどり美術印刷株式会社